

---

# 中坊戦記

Gale

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中坊戦記

### 【Nコード】

N6808A

### 【作者名】

Gale

### 【あらすじ】

普通の中学3年生、如月竜也は何故か昔から不良にからまれる…

## くプロローグく（前書き）

こついう場での執筆…というより執筆自体初体験なんで、正直『つまらない』と思います。だからこそ、おもしろい物が書けるようになりたいので、よろしければ感想を下さい——

## くプロローグく

「たりい…マジたりい…」

俺は如月竜也<sup>キサラギタツヤ</sup>。何処にでもいるなんの変哲もない中学三年生だ。

今俺は何をしているかというところ、他校の生徒五人に囲まれている…

「竜也、先週は世話になったな」

指をポキポキならしながらデ…ゲフンゲフン、脂肪によって五人のうち一番体格がいいと思われる奴が俺を睨みつける。

「なあ、よく考えようぜ？先週は君たちが善良なる一般ピーポーたる僕をかつあげしようとしたから…」

「るせえ！俺はデメエに蹴り上げられた息子が未だに二倍の大きさに腫れ上がってるんだよ！！」

「どうりでもっこりと…」

「裕也、やつちまおうぜ」

裕也とは、このデ…ゲフンゲフンの名前らしい…

「しょうがない裕也ちゃん…おっちゃんほんとにはやりたくないんだけど…」

「ああ？デメエざけんのもいい過激にしろよ？五対一でどうやってあひいん！！」

満天の青空に『カキーン！』という快音が響き渡った。

裕也ちゃん情けない声を上げるとイチモツを手でおさえながら地面を転がり回って悶絶している。そう、俺は裕也ちゃんの二倍に腫れ上がった息子を蹴り上げたのだ。

「……………」

回りの連中が我に返る前に裕也ちゃんが立っていた所から走り抜ける。その時、裕也ちゃんの息子を踏むのは忘れなかった。

「きやうん！！」

背後で子犬のような叫び声が聞こえた…

## 1 時間目・裕也ちゃんのお願

「危ねえ危ねえ」

汗をぬぐって俺は一息ついた。

俺の名前はさつきも言った通り如月竜也だ。普通の中学三年生…のはずなのだが、何故か昔からやたらめったら不良にからまれる…いつの間にやら防護術は身についていた。

「いやあ、竜也君じゃないか!」

聞き覚えのある声だ。振り返ると一人の男が文字通り『飛び込んできた』

「へぶしっ!?!」

俺は反射的に回し蹴りをその首に入れてしまった。

男は10M程、文字通り『吹っ飛んだ』

がんがらがんがらゴキッ!最後に怪音がしたが、まあ、問題ないだろう。

俺は何事もなかったかのように歩き始めた…

「ま、ゲフツ、待ってよゴフツ、竜也あ!おえええええ」

俺がさつき蹴り飛ばした男:<sup>クドウマサル</sup>ダチの工藤優が首を『ありえない』方向に曲げながら近づいてきた。

ちなみに、俺は今までこいつを廃ビルの五階から突き落としたり、突っ込んでくるバイクへの盾にしたりしたが一度も死ななかった(死んでいたら今ここにいない)。

「わりい、いきなりだったから、つい…」

「つい、で人を死の淵にさ迷わせないでよ!あと、蹴った後何事もなかったかのように振る舞ったでしょ!」

「まあまあ、いつものことじゃん。それよりガツコ遅れるよ?」

「いつものことだししょうがないか…って何納得してんだよ俺!?しかも、チャイム鳴るまであと二分じゃん!」

工藤は走りだし、焦り過ぎて目の前の赤信号に気付かなかったらし

い。直後、トラックに撥ねられた。

朝っぱらからピンチを乗り越えた俺は、ガッコがたるくてたるくてしかたなかった。

だから、今日は一時間目から六時間目まで屋上で昼寝だ。

誤解を招くようだから言っておくが、俺は不良じゃないぞ？うん。少し不真面目なだけの一般ピーぽーだ。

「そっぴや、工藤来なかったな…」

ふと朝の情景を思い出す。

あの血の量からして死んでいないとおかしい。つか、中身でてたし。俺は屋上で一人ニタニタしていた。

その時だった。

「竜也はいるか!？」

勢いよく屋上の扉が開け放たれた。と思ったら扉を開け放ったそいつは扉の段差につまずき派手に吹っ飛んだ。

がんがらがんがらゴキッ！本日二度目になる怪音を聞いた。

「……………」

「た、竜也…やっと見つけた…」

俺はてつきり工藤だと思っただが、首が『ありえない』方向に曲がっていたのは俺が今朝イチモツを蹴り上げた『裕也ちゃん』だった。

「竜也、頼みが」

「断る」

俺は迷いなく即答した。どうせ、タイマンかなんかの申し込みだらう…

「違うん」

「断る」

発言の余地を与えない。ただでさえ『喧嘩に明け暮れている不良』と誤解をされて女子から嫌われているかわいそう俺は、これ以上面倒事を増やしたくないのだ…

「お願」

「嫌だ」

「どうしても」

「無理」

「聞くだけ」

「黙れ」

こんな押し問答を約一時間三十分繰り返した末、俺は仕方なく話し  
だけ聞いてやることにした…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6808a/>

---

中坊戦記

2010年10月11日20時04分発行